

本稿は、5月20～21日に行われた「自治労連第63回中央委員会」での中央委員発言について、加筆・修正したものです。

## 青年たちの成長とつながりを発展させよう 中国ブロック「青年未来づくりプロジェクト」

山口自治労連

私からは、中国ブロック「青年未来づくりプロジェクト」(以下、青プロ)の取り組みを報告することで討論に参加します。

### 青プロ再始動！

#### オンラインの利点をいかして実行委員会

中国ブロックの青プロは、中国5県、岡山・広島・山口・鳥取・島根の各県から選出された青年組合員が実行委員となり、開催に向けた準備を進めています。5月29日にプレ企画、6月26日に本番です。

コロナの影響で組合活動がストップするなかで2020年6月に行う予定だった青プロも中止になり、本部の提起を受けて再開したのが昨年6月末のことでした。

時期でいえば、オリンピック前のコロナ第6波がちょっと落ち着いた頃、まだまだコロナの先行きも見えず、組合活動自体も県単位の活動はもとより、単組での新歓行事も全くストップしているような状況での再始動でした。

中国5県では、県単位での青年部が活動していたのが岡山と山口のみ。ブロック単位での青年部はありません。企画運営に慣れていないメンバーで、全く新しい取り組みを1から作り上げていく必要がありました。

また、岡山・山口は主に自治体職員が中心となっていますが、鳥取や島根は病院や介護職員が中心、広島は学童保育や福祉事業団が中心と、職種や置かれた立場もバラバラです。

再開した実行委員会では、2020年に行う予定であった企画は取りやめることとし、新たに各実行委員がアイデアを持ち寄ることから始めました。

話し合う中で、いずれ親や自分自身の問題として降りかかるであろう介護の問題であれば職種などにとらわれないことから、これを中心テーマに据えることとして、広島県福山市の鞆の浦というところで、「その地域で暮らし続けたい」と願う利用者に寄り添い、先進的な取り組みを行う「さくらホーム」の事例を通して学習を行うことを決定しました。

ちなみに、この実行委員会はコロナによる中断前はリアルに集まったの会議を行っていましたが、今はzoomを使ったウェブ形式で行っています。

日程調整も予算もあまり気にせずに「気軽に」「いつでも」行うことができるという利点をいかして、会議が始まるのは仕事が終わって家に帰った夜7時30分から、終わるのは9時30分を過ぎているというような会議をしています。

プレ企画開催目前に迫ったいま、昨日も行いましたし、おとといは、現地施設の取材として鞆の浦を訪れ、1日かけて取材もしました。週明けの月曜日には再開してから数えて24回目の実行委員会を行う予定です(5月21日現在)。

### 会議を重ねる中で成長

昨年6月末に再開して11カ月、平均して2週間に1回はウェブ上で顔を合わせ、2時間以上、この青プロをどうするか、ああでもないこうでもない、と話し合ってきたわけです。全く会ったこともない人がいるなかで、全くやったこともないことを企画していかねばならない状況でしたが、これだけ頻繁に会議を行い、ウェブ会議で1人1台をつないでカメラの前で話し合うわけですから、リアルでの会議よりも顔を知っている、という風になっています。

リアルの会議では、マスクは欠かせませんし、コロナ以後に知り合いになった人は、マスクをつけた顔が標準で、時々マスクを外した顔を見ると違和感があるといった奇妙なことになっていますが、ウェブ会議を通して非常に密な関係で結ばれています。

私も、フォロー役として会議に参加しているのですが、この1年で青年たちの成長を感じ取っています。

当初、だれでもいずれは関係してくるであろう、ということで高齢介護をテーマに決めましたが、「高齢者だけでなく、障がい者や子ども、多世代の人々がつながって安心して暮らせる地域共生社会の実現」という「さくらホーム」の理念に触れるなかで、生活保護のケースワーカーとして日々忙殺されながらも実行委員会に参加する市役所職員が、コロナ

で大変な状況の中、学童保育で働く支援員が、さくらホームと同様に介護施設ではたらく介護職員が、自分たちの仕事を見つめなおす機会にもなっています。

先日の取材では、さくらホーム施設長の羽田さんにお話を伺ったのですが、その中で印象に残っている言葉が2つあります。

ひとつは「福祉において最優先されるのは当事者の思い」であること、2つ目は「職員が地域とつながることの重要性」です。

いずれも、自治労連本部が掲げた「自治体労働者論の継承」という青プロのテーマにつながるものではないでしょうか。

当初、「自治体労働者論って何？」という感じだった青年たちが、何十回もの実行委員会を重ねるなかで、自然とそこにたどり着いたことが何よりも素晴らしい宝だと思います。

プレ企画、その1カ月後の本番と、残念ながら中国5県の青年が1カ所に集まってという形にはなりませんでしたが、集まれるところは県単位で集まるなどの工夫をしながら行う予定です。実行委員の得た気づきが、より多くの参加者に届くよう、最後までフォローしたいと思います。

また、10月に行う中国ブロック総会では、分科会で青年がリアルに集まれるようにしたいと考えています。この機会にできたつながりが更なる発展を生み出せるようにがんばります。

ありがとうございました。